



JUDGEMENT

scene-5

鳴海はるか

「はあっ！」

菜奈が異変に気付いてベルフェの上空を一閃する。プチプチと切断される無数の糸。

ベルフェのほうはというと、肩口から覗く切断面は驚くほど綺麗なものだった。

「ベルフェ、大丈夫！？」

「大丈夫とはっきりとは言えませんがこれくらいなら問題ありません。菜奈さん、私のほうもカバーできますか？」

ベルフェは平然とした表情でそう告げた。ただそれが菜奈には気を遣わせまいとするように見えた。

だから菜奈もそれ以上は何も詮索はしない。

「まかせて！」

菜奈がベルフェと密着するほどの距離で、手にした刀を鮮やかに振る。その姿はまさに舞い踊っているようだった。

そしてベルフェが魔法の詠唱に入る。

「キーズィ・ヤ・エイケイ・エムター・ハキ。来たれ。吹きすさぶ風の嵐。リルウーンド！」

その瞬間、ベルフェたちの周りを風のカッターが無数に吹き荒れる。

見る間に周りに張り巡らされていた糸が無くなり、静寂が訪れる。

二人は空中に気をめぐらせるが、やはり糸の脅威から逃れることができたようだった。

「お見事！しかし残念！糸のことに夢中になるあまり、私の存在を忘れるなど笑止千万。さて、とりあえずこの女はどうしてあげましょうかね〜。」

二人は糸の攻撃を防ぐのに全力を尽くしていたために、完全に油断していた。

アンキーセースの潜った穴のことなんてすっかり忘れ去っていたほどに。

そして今、アンキーセースは菜奈の首根っこを締め付け、宙に吊り上げていた。

「貴方が言うように、私たちは完全に油断していました。いえ、実は私はわざと貴方が出てくるのを待っていたのですよ？」

「ふん。この期に及んで世迷いごとを。こちらはこの娘の命もいつでも奪うことができる。しかも貴方は文字通り片手落ちなのですよ？」

こうして話している間にも、首を絞められている菜奈の顔が苦痛に歪んでいく。

ベルフェは片手に持っていた剣をアンキーセースに突きつける。

突きつけると入ってもその距離は2 mほどあるため、相手を指すだけだったが。

「やれやれ、ついに頭でもおかしくなりましたか？ベルフェゴール。そんな距離からでは攻撃は届きませんか？」

ベルフェがそんなアンキーセースに向かってニヤリと笑う。

「アンキーセース、貴方の負けです。先ほどは貴方の間合いに入ってたんですけど、今回は私の間合いに入ってるんですよ。」

「何——」

アンキーセースの首をベルフェの手が掴んでいた。先ほど斬りおとされた方の腕が。

ベルフェの体から離れたその腕は、アンキーセースの首を容赦なく絞めていった。

アンキーセースも菜奈の首を絞めようとしていたが、ベルフェの腕の力のほうが強くその力はどんどん弱まっていた。

「ゴキッ。」

アンキーセースと菜奈が地面に落ちるのは同時だった。

「ゲホッ、ゲホッ、ハアッ、ハアッ、ハアッ。」

菜奈が拘束から開放されて、荒い呼吸を繰り返す。ベルフェが心配そうに声を掛ける。

「菜奈さん、大丈夫ですか？」

「私よりもベルフェのほうは大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。問題ありません。」

しかしその答えに不服そうに、菜奈がベルフェを見つめた。

「・・・正直に言わせてもらえば大丈夫ではないですよ。軽いとはいえ無数のダメージを受けてからの腕の切断、魔法を使った上で切断した腕を操ってのことですから。まあ疲れました。できれば休息したいです。」

「うんうん、そうよね。それでこいつって止めさしたほうがいいよね？」

実際ベルフェの攻撃によって首を骨ごと砕かれているが、体はぴくぴくと痙攣していた。

「できれば淑女にそのようなことをして頂きたくはないのですが、今回は菜奈さんにお頼みしたほうが良さそうです。どうかささっとやってしまってください。」

「了解。さあ、行くわよ！」

再び菜奈の刀が舞い踊る。

ベルフェも思わずその光景に見入ってしまうほどだった。

後に残ったのは肉塊のみ。

「乱切り終了！こんなもんでいいよね？」

「いや、相変わらず見事な刀捌き。これだけ破壊しておけば復活することもないでしょう。それでは戻ることにしましょうか。」

ベルフェは自分の落ちた腕を拾うと肩に付けた。そしてなにやら魔法を唱えると、その腕は胴体に戻っていた。

「それ便利よね。よっぽどのことじゃない限りその能力があれば大丈夫なんじゃないの？」

菜奈の言葉にベルフェは苦笑しながら答えた。

「確かに今腕が元の胴体にくっきました。ただこれは見せ掛けだけのものなんです。今は魔力がほとんど残っていないので、応急処置しただけです。きちんと治すには休息が必要です。」

「へー、そうなんだ。めちゃくちゃ便利だと思ってたけどいろいろ制約があるんだね。」

「人間より優れているとはいっても異能の力ですから仕方ありません。使いどころさえ間違えなければ有利に戦えるのは間違いありませんし。」

「なるほど。じゃあベルフェ疲れてるみたいだから、私がおんぶして連れて行こうか？そっちのが楽でしょ？」

菜奈がいたずらっ子のような顔で聞く。もちろんベルフェの答えは決まっている。

「私のようなものが、菜奈さんに私を背負わせるなどとんでもない。それに相手を背負うという行為は、そもそも男性が女性に対して行うものですよ。」

ベルフェの期待を裏切らない返事に、菜奈はとても気分が良さそうに歩き出すのだった。

邸に着くと菜奈の有無を言わさぬ勢いに押されて、ベルフェはベッドで休養を取らされたのだった。

「ベルフェ、もう少し落ち着くまで寝てなきゃダメなんだからね？とりあえずおかゆでも作ってこようか？」

ベルフェは苦笑しながらそれに答える。

「いえ、別に風邪を引いたわけではありませんから。傷口が治って魔力も戻れば問題ないですよ。」

「たしかにそうかも。じゃあ私にできそうなことはないかな？」

「そうですねー、それでは少々奈々さんに聞きたいことがあるのですがいいでしょうか？」

「私に答えられることなら。でもそんなに面白いことはないと思うよ？」

「いえ、少しまじめな質問です。ずばり菜奈さんは今までのことを全て覚えているのでしょうか？」

菜奈は少し考え、口を開いた。

「たぶんほとんどは覚えてるかな？でも気を失ってる間のことなんかはもちろん覚えてないんだけど。」

「・・・なるほど。ということは私の記憶消去、厳密には改変を行ったのですが、それはまったく効果が無かったということでしょうか？」

「ううん。効果はあった。でも実はそれをかけられる前に実は目が覚めていて、服にペンで簡単なメモを残してたの。それで一度は記憶を失ってたんだけど、そのメモに気付いてこの事が気になりだしたの。それでこの近くに来たときにたまたま二人と神が戦いだして、フルーレが怪我をしたのを見た。そこではっきりと思い出したっていうわけ。」

「まさかそんなことが・・・。それでもあの魔法を無効化するのはいくら菜奈さんの精神力が人並み外れて優れているとはいえ不可能なはず・・・。神か悪魔でもない限りは――」

そこでベルフェは一つの可能性に気付いた。

「そういえば私が留守の間に菜奈さんは神に襲われて傷を負いました。そこまでは覚えているのですよね？」

「そうね。一応覚えているけど。」

「実はその後、菜奈さんは昏睡状態に陥って命尽きそうになっていたのです。そしてここからが重要なのですが、そこでフルーレが自分の血を菜奈さんに飲ませた。その行為自体は悪魔から悪魔へならば効果がある場合があります。しかし人間に対して行った場合に、効果があったということは聞いたことがありません。実際に過去に行われたこと自体はありますが、おそらく人間の体ではキャパシティオーバーとなってしまうのでしょう。」

菜奈はじっと聞いていたが耐えられなくなったらしく、口を挟んできた。

「要するに簡単に言えばどういうこと？」

「簡単に言ってしまうえば人間に悪魔の血を飲ませると、死んでしまうということです。でも奈々さんはそうはならなかった。これをただの偶然と考えることもできますが、私はそう思っています。」

「そんなのただの偶然じゃないの？宝くじが当たるくらいの確率で。」

「いえ。前にもお話しましたが、おそらく菜奈さんは混血であるということが大きな理由です。そしてこれは今回一緒に戦った際に思ったことなんです、奈々さんは確実に人間の身体能力を凌駕しています。おそらく全てにおいて、我々と同等の力を得ているのではないかと。もし私の言葉が信じられないのならば、今までは持てなかった重いものを持ってみるとかどれだけ高く跳躍できるとか、いろいろと試せばすぐ分かるかと思います。」

「でも仮にそんな力が私にあるとしたら記憶が無い頃からになるよね？私普通に生活してたけど何も問題なかったよ？力んで食器を壊したりとかドア壊したりとか。」

「普通に意識しなければ私たち悪魔でもそのようなものです。この邸の中にあるものなんて、全てが人間界のものです。それでも私もフルーレもそれらを壊したりしたことはありませんよ？」

「なるほどね。確かに普通に生活してたもんね。そう言われたら急に試したくなってきたかも。」

部屋の中をキョロキョロと見回し始めた菜奈に苦笑しながら、ベルフェは言った。

「それもいいですが、フルーレの様子も見てきてもらえませんか？彼も傷を負っていますから。」

「そうね。そうする。」

菜奈はベルフェに手を振りながら部屋を出ると、フルーレの部屋へと向かった。

フルーレの部屋に入ると、彼は扉を背に窓の方を向いていた。菜奈はフルーレが寝ているのかと思って声を掛けかねていた。

「・・・なんで戻ってきたんだよ。」

フルーレが唐突にぼそっと呟くようにして口を開く。

「だから、何で戻ってきたのかって聞いているんだよ。」

相変わらずフルーレは菜奈に背を向けたまま問う。

「何でって言われても・・・。記憶が戻ったから・・・。」

「記憶が戻ろうが、そのまま普通の生活を送っておけば良かっただろ。何で今ここにいるんだって言うことだよ。」

「それは・・・この前二人が襲われるのを見て記憶が戻って。それから居ても立ってもいられなくて、その時の神を追っていたらベルフェが襲われているのを見つけて・・・。」

フルーレは体を起こすと菜奈の方へ向き直った。そして菜奈に向かって手招きをする。

菜奈は恐る恐るフルーレの元へと近づいていく。フルーレのすぐ傍まで来た。

菜奈とフルーレの視線が合う。そこでフルーレが手をあげた。

「っ！」

思わず菜奈は目を閉じて固まってしまう。しかしフルーレの振り上げられた手は、ポンと優しく菜奈の頭に降りてきた。

「本当にお前は馬鹿だな。だけど無事でよかった。」

菜奈は驚いて目を開くと、ゆっくりとフルーレを見た。フルーレはただ微笑んでいた。

「・・・フルーレ、頭でも打った？」

いつもと違うフルーレの様子に、思わず菜奈は正直な疑問をぶつけていた。

フルーレは一瞬事情が飲み込めないような顔をしていたが、みるみる顔を赤くして答える。

「ああそうそう、そうだよ！ちょっとこの前やられたときに思いっきり頭をぶつけたみたいでうまく物事を考えられないんだわ。あー、頭いてえ。」

そしてまた後ろを向いて布団にもぐりこんでしまった。

「・・・ごめん。ついいつもの調子で言っちゃったけど、悪気はないから。フルーレが私のことを心配してくれてるのは分かったから。心配してくれてありがとう。」

「・・・別に気にすんな。あと俺の心配はしなくてもいいぞ。そんなたいした傷じゃないからもうちょっとすれば治るさ。それよりもお前は自分のことを第一に考えろよ。こうして戻ってきてまた事件に首を突っ込んだっていうことは、そろそろ向こうにもお前の情報が漏れ出してる可能性が高くなってきているからな。」

「・・・うん。それは承知の上だから。私は無理はしないでやっていくよ。だからフルーレもあんまり無理はしっちゃ駄目だよ。」

「ああ。もちろん俺もベルフェもなるべく無理はしないようにやるさ。ところでお前、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか？」

窓の外を見ると日が暮れ始めていた。

「神の奴等は日が落ちると行動を始めやがることが多いからな。今は俺もベルフェも戦うのにはちょっと厳しい。だから今のうちに帰るのが得策ってもんだ。俺たちのことは心配するな。日常生活ならそんなに問題なくできるからな」

「うん、そうするね。また来るから。」

菜奈はあの後ベルフェにも帰る旨を伝えて邸を後にした。日は今にも西の空へ沈もうとしていた。

「早く帰らなくっちゃ。今日は近道して帰ったほうがいいかな？」

普段は大通りを使うのだが時間がかかる。狭い路地を使った近道だと大幅に時間を短縮できるのだ。

菜奈は近道を使うことに決めて狭い路地に入っていく。

「こっちは結構暗いなあ・・・。」

狭い路地は日没間近ということもあって結構暗かった。

たまに使う道だからいいものの、初めてなら躊躇するかもしれない。

自然と菜奈の歩みが速くなる。

「っ!？」

そのとき突然、菜奈の体を違和感が襲う。体中にプレッシャーがかかるこの感覚——結界が張られたのだ。

菜奈は狭くて暗い路地を選んでしまったことを後悔したが、時すでに遅しだった。

菜奈はサッと左手にはまっている指輪——使い魔を変形させたもの——へと右手をかざす。仄かに光を放つそこから、刀を抜いた。

だが、何も現れない。前か後ろか、それとも上から・・・？

菜奈は自らの気持ちを落ち着かせ、周りの気配を探る。

——後ろ！？

微かな気配を感じ、振り返る。

そこには白いフードをかぶった男が立っていた。もちろん人間ではない。神だ。

そのフードの不自然に長い袖口から、ちらりと何かが覗いている。

それが何かはこの距離では分からなかった。だがこの状況では何か武器のような物ということだけは確かだろう。

菜奈はじりじりと間合いを詰めながら相手の出方を待つ。

だが相手は言葉を発することも無ければ動く素振りすらない。

こちらから仕掛けるべきなのか、それともひたすら出方を待つべきか。

そう考えていたとき、相手の右手がわずかに動いたのを菜奈は見逃さなかった。

だが、そのとき後ろから急に別の気配を感じる。

そんな、相手は二人！？

動揺する菜奈を尻目に前方の男の手が上がり、そこから自分に何かが迫ってくるのが視界に入る。

そしてそれに同調するかのようには後方からも攻撃の意思を感じ取る。

どうしよう、どうすれば？

そんなことを考える間にも菜奈に向かって刃は伸びてくる。

「キンッ！」

先ほどまで菜奈のいた場所で菜奈に前後から襲い掛かろうとしていた刃がぶつかり合っていた。

菜奈の姿はそこには無く、空しく金属音だけが響いていた。

「なにっ！？あの小娘はどこにいったっ！？」

菜奈の後方にいた男が叫ぶ。それに引き換え前方にいた男は静かに答えた。

「落ち着け。そう遠くまでは行ってない筈だ。」

その頃。菜奈は遙か上空にいた。

ベルフェに身体能力が上がっているはずだと言われたのを思い出して、思い切り跳躍したのだ。

少し落ち着いて観察すると、人間でいた頃よりも視力もずっと良くなっているようだった。

遙か下方に、しかも暗いのににもかかわらず、先ほどの二人がいるというのにはっきりとその姿を認識できていた。

「思ったよりずっと凄いいたい。でも、この後ってひょっとして・・・。」

そう、跳躍した頂点で少し滞空してただけ。自然と菜奈の体は落ち始める。

「嘘、嫌、死んじゃう！」

そしてそんな菜奈の焦りをさらに増幅させようとするかのように、下の二人が菜奈の方を見た。

そして菜奈の後ろから襲い掛かってきていたほうの男の方が手を伸ばしてくる。

その手から何かが飛んできた。というか正確には伸びてくるのが見えた。

・・・鎖？

空中を落下しながらその鎖を避ける術は菜奈には思い浮かばなかった。刀で振り払えるものなのか、空中でも上手く体を動かして回避できるか・・・。

考えている間に鎖は菜奈の元まで届き、足に絡まってくる。

残念ながら空中でその攻撃をかわすことは適わず、刀でも届く距離ではない。

そして先ほどまで菜奈の体にかかっていた重力による落下に加えて、下へと猛烈な勢いで引っ張られる。

このままでは菜奈の体は地面に叩きつけられるのは間違いなかった。

そして地面に叩きつけられる寸前——菜奈の体は宙に浮いていた。

左手の使い魔から蜘蛛の巣のように張り巡らされた糸によって、菜奈の体は地面への激突を免れたのだった。

「やるじゃねえか、嬢ちゃん。」

鎖使いの男が菜奈に言う。

もっとも菜奈にとっては蜘蛛の巣で身を守ったのは、間一髪のところでもたまたま蜘蛛の巣のようなものに引っ掛かれば、と思ったら蜘蛛の巣が発動しただけで故意にしたわけではなかった。

「ふん。これくらい当たり前よ。」

菜奈は敢えて余裕があるように見せるために強がって言った。

そして地面へと降りると、糸は使い魔の指輪へと吸い込まれていった。

「アッサラコス。おそらくこれはこの女の虚言だ。私たちの動きを封じようとする策だろう。」

最初に菜奈の前にいた男が静かに告げる。菜奈は心の中で舌打ちしながらも、平静を装っていた。

「けどよ、イーロス。この嬢ちゃんの戦闘能力は未知数だぞ。用心した方がいいんじゃないか？」

「それもそうだな。しかしお前の放った鎖はいまだ娘の足に絡みついている。少なくとも我々の方が有利なのは間違いないだろう。」

「それじゃ改めてお手並み拝見と行こうか、嬢ちゃん。」

アッサラコスが鎖を思い切り引く。このままでは菜奈の体は地面を思い切り引きずられることになる。

だが、菜奈はそれと同時に地を蹴っていた。よく見れば、菜奈の足に絡みついていた鎖はすでに菜奈の刀によって切断されていたのだ。

「アッサラコス、避けるんだ！」

イーロスが叫ぶがその時には鎖を引いた反動でアッサラコスの体は後ろへと倒れ掛かろうとし

ていた。

「くそっ、油断した！」

アッサラコス は 倒れそうになった体を何とか振って立て直そうとする。

しかしそんなアッサラコスの視界に飛び込んできたのは脚だった。

菜奈の膝がアッサラコスの顔面を捉える。そしてさらに後ろのめりになるアッサラコスを足場にして結界の向こう側へ思い切り跳んだ。

あっという間に菜奈の姿はその場から消えていった。

「思ったよりやるようだな。アッサラコス、今日は撤収だ。作戦を練り直す。」

イーロスが声を掛けるが、アッサラコスはピクリとも動かない。

「チッ、気絶したのか。仕方のないやつだ。」

イーロスが呪文を唱えると二人の周りが光った。そして光が消えるのと同時に二人の姿も消えたのだった。

そして結界もなくなり、元の世界へと戻っていった。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思ひます。
そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。
それでは、次回作でまたお会いできることを祈ってー。

2013年8月1日

JUDGEMENT scene-5

<http://p.booklog.jp/book/69419>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69419>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69419>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ